

# 島田 忠雄（しまだ・ただお）

## 1、プロフィール

歌人、昭和7年「創作」に入会し、19年同人。39年「潮汐」に入会し、鹿児島寿蔵に師事。アララギの詠風ながら、人間味のある抒情性豊かな作品を残した。

<生没>

1911(明治44)年3月2日～1988(昭和63)年10月19日

<代表作>

『島田忠雄遺歌集』

<青森との関わり>

旭川市生まれ。青森県歌人懇話会の理事、「潮汐青森支部八戸歌会」を結成し、後進の育成に努めた。

## 2、作家解説

大正14年に青森県農産物検査所に勤務し、昭和10年に退官。その後住友商事札幌支店に勤務する。18年に一生つきまとう病気を発病し、療養生活に入り、19年に弘前に移り住む。療養を終えて、24年に袋物製作に従事する。しかし35年に再び発病し、以後10年間療養生活に入る。

このように体調があまり芳しくない中、生活のための仕事もたびたび変えざるを得なくなり、住まいも旭川、青森、札幌、弘前、八戸と移り住み、晩年の17年間は八戸に過ごした。

そんな中、昭和7年に歌誌「創作」に入会し、19年には同人になり、ひたすら歌を作り続け、特に39年歌誌「潮汐」に入会し、鹿児島寿蔵に師事して以来、忠雄の歌はさらに磨きがかけてきた。46年に八戸に職を得て、52年に「大館公民館短歌クラブ」を発足させ、それが後に「潮汐青森支部八戸歌会」に発展させた。平明でありながら、行きとどいた観照と深みを十分に発揮し、実に味わい深い作品を作り続けた。

「潮汐」の友人櫛引唯治が「島田の歌に、心温かい作者の人間性をみるべきである。これは肉親に対してはもちろんのこと、友人や職場の人々或いは中国の孤児に対してなど、作者のヒューマニティが広く、余すところなく詠われている。また〈幾度もなき残年と思ふゆゑ心緩めずはげみてゆかむ〉、最晩年にいたってなおこのバイタリティ、精神力の強靱さは目を見はるものがある」とデーリー東北の『島田忠雄遺歌集』の書評の中で述べている。

40年に青森県歌人賞を受賞し、その後青森県歌人懇話会の理事、東奥日報歌壇、デーリー東北歌壇の選者をつとめ、地域の短歌の普及と後進の育成に尽力された。

### 3、資料紹介

#### ○『島田忠雄遺歌集』

図書

1990(平成2)年1月20日

195 mm × 135 mm

昭和39年から62年までの作品の中から、713首を選んで年代順に収め、順子夫人によって編集された遺歌集。三ツ谷平治の序歌、群緑会員の追悼歌、著者の近影、馬場あやの島田忠雄先生と八戸歌会、順子夫人のあとがき、略歴を掲載している。